

令和元年6月18日現在

機関番号：17101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13235

研究課題名（和文）格及び一致素性の本質を捉え機能範疇の分裂・融合・配列を解明する統語理論の構築

研究課題名（英文）Toward a theory of Case and Agreement in terms of functional fission, fusion and ordering

研究代表者

岡 俊房 (Oka, Toshifusa)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00211805

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）： 統語論研究におけるミニマリストプログラムのもので、「格（素性）」と「一致素性」を対称的に捉え、統語部門（Narrow Syntax）から複雑な統語操作を排して併合（Merge）に限定する制限的な理論の構築に取り組んだ。普遍的には強い局所性を課しながら言語間・言語内のパラメータ的変異を機能範疇の素性構成と配列に還元するシステムのもとで統語論研究において中心的な課題となる様々な現象を説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現在統語論研究で主流となっているミニマリストプログラムのもとで、これまで真剣に問われることのなかった、そもそも「素性」とは何か、なにゆえ言語には「格」のようなものが存在するか、また、「ラベル」は本当に存在するのか、という根源的な問いに答えられるレベルの素性理論を提示するものであり、今後の統語論研究にとって一つの方向性を示すものであり、それゆえ大きな貢献となると考えられる。

研究成果の概要（英文）： Under the Minimalist Program, a recent syntactic research framework, I proposed a restrictive theory which views Case and Agreement features in the same way and restricts Narrow Syntax to Merge by eliminating complicated operations. With this system, which universally imposes strong localities and derives parametric variations from the feature composition and the order of functional categories, I presented explanations for various phenomena posing serious problems for syntactic research.

研究分野：英語学・言語学（統語論）

キーワード：素性 格 一致 位相 ラベル 移動 束縛 主語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在統語論研究で主流となっているミニマリスト(極小主義)プログラムのもとで各研究者が提案している理論には、統語派生における重要な役割を「素性」が担うという共通性があるが、素性自体の本質についてはいまだ不明のままである。ミニマリスト研究の理論的進展および言語データの蓄積をもとに、そもそも「素性」とは何か、なにゆえ言語には「格」のような素性が存在するか、という根源的な問いに答えられるレベルの理論が望まれる。

2. 研究の目的

統語論研究におけるミニマリストプログラムのもとで、「格」と「一致素性」を対称的に捉え、統語部門(Narrow Syntax)からそれ自体まったく意味特性を有しない要素を排除するとともに、複雑な統語操作を排して併合(Merge)に限定する制限的な理論の構築を目指す。その際、「素性」の本質を明らかにし、さらに、「素性」の集合体である機能的な主要部が、分裂あるいは融合し階層的に配列されるメカニズムを解明する。普遍的には強い局所性を課しながら言語間・言語内のパラメータ的変異を機能範疇の素性構成と配列に還元するシステムのもとで統語論研究において中心的な課題となるさまざまな現象を説明する。

より具体的には、次の3点について問題解決に取り組む。

ミニマリストプログラムのもとでは、統語派生において「素性」が重要な役割を演じることが共通認識となっている。しかしながら、その素性の本質についてはいまだ不明である。現在主流を構成する各理論において、EPP素性は移動を駆動するものとして定義づけられているが、実体があるわけではなく、理想的には、より高度なメカニズムからその機能を演繹することで排除すべき類のものである。また、一致素性と格(素性)は関連づけられて捉えられているが、この二者の間には非対称性があると考えられている。一致素性は、形態的に名詞類具現された場合は意味解釈を受け、動詞類に具現された場合は解釈不可能とされる。他方、格は、名詞類に具現され、解釈不可能とされる。Chomsky等の最近の理論においては、格は統語操作である「素性一致(Agree)」のいわば副産物として扱われる。格の本質とはいったい何か。そもそもなぜ言語に格というものが存在するのか。現在これはまったくのミステリーと言わざるをえない状況である。

格と語順の相関性は、言語研究において、特に言語普遍性に関わるGreenbergの研究以来、最も興味深いテーマの一つである。それにもかかわらず、これまで統語論的アプローチは成功してきていない。これには少なくとも二つの根本的な要因が考えられる。一つには、言語事実としての相関性があるまで「傾向」を表すものであるとの共通認識があることである。それゆえ厳密な統語論的アプローチが拒まれ、せいぜい機能論的アプローチ(「格が「豊か」であれば語順が自由でも文法機能が読み取れる」といった類)に頼ることとなる。二つ目には、格は形態的に具現されるものであり、各個別言語においてどのように具現しているかは言語変異の広い範囲にあり(一種の言語恣意性)当該言語において、たとえば格が「豊か」であるか等を決める絶対的基準がないことがある。しかし、理論の評価は、他の自然科学分野と同様、ある程度の捨象・理想化のもとで、説明的妥当性のレベルに達する反証可能な理論を構築できるか否かである。そうであるなら、統語論的アプローチをはなから放棄する必要はない。(この点において、機能論的アプローチは、「傾向」として捉えられる言語事実を記述するレベルを大きく超えるものとはなりがたい。)

現在、統語論においては、Noam Chomskyの提唱するラベル理論の枠組みの下で活発な研究がなされており、日本もまったく例外ではない。しかし、そもそも何故ラベルが必要なのか。意味解釈および外在化のために必要とされるだけで、意味解釈や外在化のためにラベルが必要不可欠であることを示す説得的な議論は一切無い。先行研究は、統語現象の説明にラベルが有効であることを示す経験的な議論に限定されている。そうであるならば、「強いミニマリスト命題」(Strong Minimalist Thesis)のもとで、統語理論からラベルを排除するべきではないのか。そのために理論全体を複雑にすることなく、ラベル理論が説明する現象を同等以上のシンプルさで説明するメカニズムがありうるのか検討すべきである。

3. 研究の方法

理論研究においては、先行研究の検討やデータ収集が必要不可欠なことは当然であるが、一気にアイデアが発展するのは、独自に研究に取り組んでいる他の研究者と協議・討論をするときである。本研究においては、研究目的に沿うように年度ごとに下位テーマを設定し、そのテーマに関して最先端の研究を行っている国内外の研究者と直接議論をすることを研究方法の中心とする。そのために科研費研究期間の平成28年度から30年度の間実施したのは、直接訪問し議論する(Noam Chomsky MIT名誉教授、Shigeru Miyagawa MIT教授、渡辺明東京大学教授、平岩健明治学院大学教授、阿部潤元東北学院大学教授等)、少人数の研究者で定期的に研究会を開催する(高野祐二金城学院大学教授、浦啓之関西学院大学教授、多田浩章准教授と「移動をめぐる諸問題研究会」を計8回開催)、学会で研究発表をする(日本英語学会、日本言語学会)、講演会で研究発表をする(青山学院大学、明治学院大学)、学会等に参加する(日本英語学会、日本言語学会、日本英文学会、Japanese Korean Linguistics Conference、国立国語研究所ワークショップ・シンポジウム等)などである。

4. 研究成果

本研究においては、現在統語論研究で主流となっているミニマリストプログラムのもとで各研究者が提案している理論には、統語派生における重要な役割を「素性」が担うという共通性があるが、素性自体の本質についてはいまだ不明のままである。本研究では、とくに、「格(素性)」と「一致素性」について異なる扱いをするのではなく、対称的に対をなすものとして捉えるとともに、統語操作としての Agree をシンプルなメカニズム(valuation ではなく、素性レベルの Delete)として定式化し、これにより、様々な局所性が説明できると同時に、Feature Inheritance のような特殊な操作も排除し、統語部門(Narrow Syntax)を併合(Merge)という基本的操作に限定する理論を構築する。自身の論文“Feature Checking and Movement”(2000. Tsukuba English Studies 19)で提示した基本的なアイデア(格を機能範疇の基本的な意味特性が、形態的に名詞類に具現化されたものと提案)を、その後のミニマリスト研究の理論的進展および言語データの蓄積をもとに、そもそも「素性」とは何か、なにゆえ言語には「格」のようなものが存在するか、という根源的な問いに答えられるレベルの理論にまで発展させることが当初のおもな目的であったが、3年間の研究でその範囲にとどまらない成果も得られた。以下順次説明することとする。

(1) 本研究においては、ラベル理論を越えるべく、ラベル付与そのものを不要にする、強い局所性を課された素性一致と位相のシステムを構築することに取り組んだ。これにより、ラベル理論が扱う主な現象(主語や WH 句が、それぞれ TP や疑問節 CP のエッジに移動しそこに留まらなければならない)が、ラベル付与無しに説明可能となり、さらに主語や付加詞からの抽出不可能性も説明可能となる。

(2) Chomsky のラベル理論が説明する現象をより細かく、またそれを越えてより広い現象(抜き出し領域に関わる条件等)を説明する理論を精緻化する作業において、「一致操作」を「主要部移動」と統一的に説明するアイデアを得て、これを具体的に展開した。主要部移動が主要部と主要部の Set-Merge であるのみならず(Pair-Merge は理論から完全に排除)、一致操作も主要部移動と同じく主要部の Set-Merge であると分析した。両者の違いは、主要部移動として表面化する現象は併合された集合が転送(Transfer)後に語形成の適用を受けるのに対し、一致操作の場合は、復元可能性の下で削除される(副次的に、マッチする素性の対の一方が削除される)ことによって生じる現象である。つまり、これは素性一致を非顕在的な主要部移動として捉える発想である。このことにより、統語論研究において重要な課題である、何故素性一致という現象が存在するのか、のみならず、非顕在的操作とは何か、という問いに答える一つの道を拓くことが期待できる。実際に、この非顕在的な主要部移動の理論を非顕在的 wh 移動現象、そして束縛現象にまで応用して適用する分析を提案した。

(3) ラベル付与そのものを不要にする、素性一致と位相(転送)のシステムを構築することに取り組み、ラベル理論より細かく、より広く現象を説明すべく理論を精緻化して対称性(あるいは非対称性)に基づく主語の統語的位置を説明するとともに、素性一致操作を非顕在的な主要部移動とする仕組みの精緻化および非顕在的 wh 移動現象および束縛現象に適用する分析の精密化を行った。具体的に次のとおりである。

素性一致において予期される介在効果が見られない場合には、フリーライド(ただ乗り)が働く。これにより、通常後置できない主語が許されることになる。

線形化のメカニズムを素性一致に基づいて構築した。これにより、Kayne (1994)等の線形化理論からラベル(およびプロジェクション)を排除することに成功し、後置主語等の語順が正しく捉えられることになる。

素性一致のプロセスを、主要部どうしの探査と併合とそれにより形成された統語体の転送と削除という一連の操作(いわば非顕在的な主要部移動)として定式化し、NS(狭い意味での統語部門)を基本的な併合操作に限定することに成功した。

多重 Wh 疑問文等に見られる元位置 Wh 句はしばしば非顕在的 Wh 移動により分析されるが、これを非顕在的な主要部移動として定式化し、非同所的な相互作用である演算子合併が局所的に捉えられることになる。

この分析をさらに束縛現象(照応関係のみならず、同一指示・離接指示関係も)に応用し、言語の下位モジュールを想定することで言語を複雑化する束縛理論を解体した。これは、言語の進化も射程に入れたミニマリストプログラムのもとで強く求められる単純化であり、統語理論に進展に新たな方向性を与えるものである。

これらの成果の主なものについて現在執筆中であるが、これは、開拓社「最新英語学・言語学シリーズ(仮題)」全22巻(2019年秋もしくは2020年春より刊行開始予定)の第2巻『移動現象を巡る諸問題』に所収予定の「ラベリング、素性一致、そして非顕在的な主要部移動」(仮題)として発表予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計3件)

岡 俊房

他動詞虚辞構文と主語倒置構文：ラベル付けを排した素性一致理論による分析
An Agree-based non-labeling approach to Transitive Expletive Construction and Subject
Inversion、

日本語学会第 157 回大会、

2018 年 11 月

岡 俊房

Agreement and Covert Movement (一致と非顕在的移動)

日本英語学会第 35 回大会ワークショップ：非顕在的統語操作の発展と拡張、

2017 年 11 月

岡 俊房

一致と転送：EPP、ECP および CED に対する非ラベル付けアプローチ

(Agree and Transfer: A non-labeling approach to EPP, ECP, and CED)、

日本英語学会第 34 回大会シンポジウム：移動をめぐる諸問題、

2016 年 11 月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：